

研究成果報告書

研究課題名：「*Lā Tahzan* の分析とモロッコ人ムスリムへの影響についての現地調査」

研究代表者所属・氏名：政策・メディア研究科 後期博士課程 3年 兼定 愛

1. 概要

本研究では、悲しみを乗り越えて幸せに生きる方法をイスラーム的観点から説いた、現代アラブのベストセラー *Lā Tahzan* [アル＝カルニー2002] が、モロッコのムスリムたちの抱く信仰と、実生活にどのような影響を与えているのかを、定量的アンケート調査を用いて明らかにする。本調査と、文献調査を経て、社会現象とも呼びうる同書の大流行の背景にある、現代社会に生きるムスリムの信仰に生じた危機やそこから見出しうる希望の一端を描き出す。

2. 背景

2002年、サウジアラビア人イスラーム学者兼説教師アル＝カルニーが *Lā Tahzan* (悲しんではならない) をリアドで出版した。同書のタイトルはイスラームの聖典『クルアーン(コーラン)』からの引用であり 500 ページ弱の大著であるが、幅広い年齢層・社会的背景の男女に支持され、「アラビヤ語書籍史上最大売り上げ」と報じられた。その後発売から約 10 年間でアラビヤ語版(原典)は 1,000 万部以上を発行、翻訳版は 10 ヶ国語以上に及んだ。この人気の様子はニュース番組などで度々報じられ、同書は一種の社会現象と呼びうるほどに普及した。

同書には「イスラーム心理学」という分類名が付されており、内容は主に、イスラーム的な「悲しみの乗り越え方」である。現代人が日常生活のなかで感じる様々な悲しみや不安、絶望などを題材に、古今東西の多様な具体例を示しながら、聖典『クルアーン』と預言者ムハンマドの言行録である『ハディース』とに基づいて解決策を示していく内容の説話が、345 種類に分かれて掲載されている。

近年、ムスリムの心理や思考方式を理解しようとする研究は少なくはない。特にアメリカでは 2001 年の同時多発テロ以降、ムスリムへの差別の横行に伴い、ムスリムの心のケアの需要が高まったことから、彼らの信仰や思考方式への理解が、心理学をはじめとする分野で求められるようになった。また日本でも、ムスリム留学生の増加が意識されるようになり、彼らへの宗教的配慮や心理カウンセリングの手法について論じられている。しかし、少なくとも筆者がこれまで調査した限りでは、イスラームは地域文化への適応における齟齬の要因として描かれる傾向にあり、ムスリムたちがそうまでして信仰を守ろうとする動機や彼

らにとっての信仰の意義には着目されていない。そのため、信仰を理解する必要性が強調されるにも関わらず、信仰を理解するための具体的な方法についての考察や提示は不十分であるといえる。

一方で、社会現象と呼びうるほどのブームを引き起こした *Lā Tahzan* に関する研究は、インドネシア語での研究を除けば、つまり、英語、アラビヤ語、日本語での研究は、ほぼ皆無である。その要因としては、アラブ世界の学者はしばしばその伝統主義が指摘される状態であり、彼らにおいては大衆向けの現代的な文献を研究対象にする文化がないこと、また、欧米においては著者アル＝カルニーが危険人物であるとの噂も横行し一部の人の間で偏見が根強いこと、また、日本ではイスラーム心理学の研究が殆ど未開拓であることなどが想定される。いずれにしても同書は未だ、悲しみを乗り越える際のムスリムにおける信仰や心理を理解するための研究対象として分析・考察される価値があるにも関わらず、十分に着目されていない現状にある。

3. 調査地の選定について

モロッコを今回の調査地として選んだ理由は 3 つある。第一に、モロッコにおいて *Lā Tahzan* が普及し多くの人に愛されていることが既に分かっているからである。その情報はモロッコ人への事前調査から得ており、さらに、著者アル＝カルニーが同書の序文において、モロッコで講演を行った際に同書の熱心な読者たちに迎え入れられた旨を語っていることから垣間見られる。また、自ら現地で調査を行い、より具体的で正確な状況を把握することは、本研究にとって不可欠である。

第二に、モロッコは筆者にとって調査協力を得やすい場所であるからである。過去に 4 度奥田敦研究会の活動で訪れ、各都市の大学や日本語教室などの関係者との交流を深め、研究内容に関する議論も行ってきた。このように受け入れ態勢のある場所は最初の調査地として適切であると考えた。

第三に、現在モロッコは治安が比較的安定しており、外務省による危険情報もレベル 1 (十分注意してください) に留まっているため、渡航や調査の実施が、他の候補地よりもはるかに現実的であるからである。

実際の旅程は次のとおりであり、11 泊 12 日の現地滞在を通して、約 100 名に対して、自らの研究を紹介し、*Lā Tahzan* についての意見を聞き、アンケート調査への協力を呼びかけることができた。

	日付	宿泊地	調査内容
1日目	8月22日	カサブランカ	カサブランカ国際空港に到着。3名の日本語学習者と交流、調査協力の呼びかけ。
2日目	8月23日	ムハンマディーヤ	20名ほどの日本語学習者と交流、調査協力の呼びかけ、アブスライマーンにあるSFCの留学生の実家を訪問、ご家族と交流。
3日目	8月24日	ラバト	15名ほどの日本語学習者と交流、調査協力の呼びかけ、La Tahzanについての認知度聞き取り。
4日目	8月25日	シャウエン	これまでに得た調査協力者の情報整理、アンケート見直しなど。
5日目	8月26日	フェズ	ムハンマド・ビン・アブドゥッラー大学にて30名ほどの日本語学習者と交流。交流会の一環で、自らの研究概要の紹介を含むプレゼンテーションも実施。現地の学生の実家にも訪問。
6日目	8月27日	フェズ	桜日本語学校にて、15名ほどの日本語学習者と交流、調査協力の呼びかけ。
7日目	8月28日	メルズーガ	フェズからメルズーガへ移動。
8日目	8月29日	メルズーガ	これまでに得た調査協力者の情報整理、アンケート見直しなど。
9日目	8月30日	メルズーガ	これまでに得た調査協力者の情報整理、アンケート見直しなど。
10日目	8月31日	アガーディール	LIAL語学センターにて20名ほどの日本語学習者と交流、交流会の一環で、自らの研究概要の紹介を含むプレゼンテーションも実施。調査協力の呼びかけ。
11日目	9月1日	マラケシュ	15名ほどの日本語学習者と交流、調査協力の呼びかけ。
12日目	9月2日		カサブランカ国際空港出発。

4. 調査の進捗状況と今後の展望

まず、カサブランカ周辺に在住の学生への聞き取りを通して、*Lā Tahzan* についてあまり知らない人が多いという印象を受けた。かろうじて著者名とタイトルとが結びつく人もいたが、意識的に読んだ経験のある学生には出会えず、反応も良くなかった。しかし、その後訪問した各都市では、だいたい10人中8~9人くらいの割合で同書を知っており、また、同書に対して好感を持っていない人には出会わなかった。特にフェズでは、イスラームに精神的な癒しを見出し、それをわかりやすく説く書として同書を熱心に熟読している人々に出会った。Sさん(女性・25歳)からは、同書への意見や感想を書き溜めたノートをプレゼントしてもらった。また、Mさん(男性・22歳)は、少なくとも3回は全編を読み返しており、今も、夜寝る前には必ず同書を読むのだと熱心に語っていた。

現地を離れてからも、モロッコで出会った人々とは継続的に連絡を取り合っており、その

中で、インターネット上で公開中のアンケート調査のリンクを送り、協力を呼び掛けた。現時点ではモロッコ人の回答者数は 18 名に留まっている（他のアラブ諸国の回答者を合わせると 92 名）。これに関して、今回の現地調査で出会った人々を中心に再度協力の呼びかけを行い、回答を分析する必要がある。現在、すでにある回答を試験的に分析途中であるが、まずはこの作業を完了させ、読者の声を把握し、定性的調査の準備を進めていきたい。

5. 謝辞

森泰吉郎記念研究振興基金のご支援のおかげで、これまでになされたことのない、ベストセラー *Lā Tahzan* についての、モロッコでの聞き取りによる実態調査を行うことができました。インターネット上の書籍販売サイトのレビューなどからは把握しきれない生の声、日常生活における信仰の持ちようへの影響などについて、興味深いデータを集めることができました。定量的アンケート調査に関しては、現時点ではまだ分析の途中ですが、継続して作業を行い、博士論文に必ず生かしたいと思っております。このような素晴らしい機会をいただけましたことに、心より御礼を申し上げます。

6. 参考文献

- عائض عبد الله القرني، لا تحزن، مكتبة العبيكان، 2002.
(アーイド・アル＝カルニー『悲しんではならない』、リヤド：オビーカーン社、2002 年。(第 24 版：2009 年))